

木馬会会報(創刊号) 1/2

天皇賞特集

～木馬たちの予走(天皇賞・春、京王杯SC編)～

予想者 覆面デスラー

天皇賞・春

◎…ムッシュェクル ○…ビワハヤヒデ ▲…ナイスネイチャ ×…アンダーキング

…予想者の屁理屈…

阪神に合う馬が来るね。切れ味勝負、追い込み一手のナリタタイシン、マチカネタンホイザは消しだよ。ステージチャンプは初の58kgがネックで消しだし、基本的には◎○▲の三巴。最も怖いのは先行できて差し脚のあるマル地アンダーキングが特注ってとこだね。

京王杯SC

◎…ドルフィンストリート ○…サイエダティ ▲…スキーパラダイス

× ケイウーマン

…予想者の屁理屈…

G I 安田記念を考えると、ここで外国馬は負けるわけにはいかない。ドバイの馬を除く◎○▲の三巴だね。距離短縮で改めてケイウーマンを見直すのも手じゃないの。

予想者 A

天皇賞・春

◎…ナリタタイシン ○…ビワハヤヒデ ▲…ナイスネイチャ

…予想者の屁理屈…

スローペース必至の組み合わせだが、◎の決め手の鋭さを買いたい。基本的には○の残り目との一点勝負だが、怖いのは▲の嵌まったときの差し。

予想者 TP

天皇賞・春

◎…ビワハヤヒデ ○…ムッシュェクル △…ナリタタイシン

△…ステージチャンプ

…予想者の屁理屈…

この相手なら、◎は連を外さないだろう。相手も○ではほぼ決まり。リアルシャダイ産駒は総じて早熟型だが、この馬のように途中長期休養を挟んだ場合は年食っても走る。すでに決め手はG I 級で、ほぼこの一点で決まりだぜベイベー。5倍つくんなら万賭けの覚悟。ナリタは、この距離であの脚を使えるか疑問だが、今の阪神は極端に時計が早く(今週、1600 1.34.0と今までのレコードを1.3秒短縮している。)、2000のレースをすれば、差しきりまでである。しかも鞍上は天才武。消せまへん。ステージも調子に乗ったリアルシャダイ産駒の黒鹿毛。ライスシャワー級のしぶとさを見せないとも限らない。鞍上南井で、菊花賞2着がある。

予想者 B

天皇賞・春

◎…ビワハヤヒデ ○…ムッシュェクル ▲…ナリタタイシン

…予想者の屁理屈…

今回の天皇賞では穴買いは禁物。上記3頭のマッチレースで仕方のないところ。中でも中心は何といっても◎。去年の年度代表馬は伊達じゃない。G I は菊花賞onlyといってもほかはすべて2着。そのときの1着馬との馬身差は全部足しても1馬身と開いていないとは、超堅実もいいところ。おまけに故障知らずとは名馬中の名馬といっても過言ではないだろう。マックイーン引退、テイオー不在のこのメンバーでは圧勝しても不思議ではない。2番手は距離、コースともピタシカンカンの○か。7才になってからの充実度は怖い。完全本格化の感在り。抑さえはなぜか天皇賞に強いMr天皇賞武豊騎手騎乗の▲。高本君夫流に言えば、武豊の“武”、ナリタタイシンの“シン”、併せて神武(天皇)は天皇賞では絶対視できるものがあるとのこと。いずれにしろこの3頭ではほぼ決まり。…補足…◎の1着は堅いが、もし紐に上記2頭以外がくるケースがあるとしたら、それは音引き馬名馬だ！(例)ステージチャンプ

ホワイトストーン

私の初めて愛した馬へ

私が本格的に競馬を始めてから3週間目の90年1月13日。4歳馬にとって初めての重賞である京成杯、馬の見方もまだろくにわからない私は中山競馬場のパドックで、出走する各馬の体、目、仕種を穴の開くほど見詰めていた。その日の光景は今でもはっきり覚えている。真冬にもかかわらず暖かな強い陽射しが差していた。ホワイトストーンはこのレースに2着。私は馬券を外し、その夜こう反省している。「ホワイトストーンは目が怖かったから削ったのだが、彼はいきり立ってはいなかった。つまり静かに燃えていたのだ。」静かに燃える男ホワイトストーンはその後の春のクラシックシーズンを、弥生賞3着、皐月賞8着、NHK杯3着、ダービー3着と煮え切らないがなかなかの成績を残して放牧に出された。

私にとって初めての海外旅行から帰った翌日、9月23日。4週間、競馬から全く離れていたことと、未知の世界での緊張感から解き放たれたことからか、たいした研究をできなかったにもかかわらず、私は初めて競馬場にいったときのように胸をわくわくさせながら中山へと急いだ。その日のメイン、セントライト記念には、ダービー以来4か月ぶりというホワイトストーンが出走してきた。秋競馬が始まったとはまだいえない9月の中山開催、のんびりした雰囲気と残暑の中、その日も静かに燃えるホワイトストーンは16キロ増と、数字だけで判断すればかなりの太目であった。しかしその体は引き締まり、磨き上げた石のような輝きを放っていた。今から考えるとそれが彼を愛し始めた最初だった気がする。目を見張る成長振りやサラブレッドとしての美しさ、そしてレースでの圧勝振りが相成って、自分がこの馬の強さを初めて見抜いたのだという自賛と、素直な嬉しさを感じさせた。その年の秋の彼の活躍は私の期待を満すどころか大きく上まわるものだった。私自身も京都まで出向いた菊花賞は得意とはいえない距離で2着。ジャパンカップでは見せ場十分で日本馬最先着の4着。そしてとうとうグランプリ有馬記念では1番人気に支持された。結果はオグリキャップ奇跡の復活の前に3着と破れたが、オグリなき後の芦毛伝説の後継者として万人に認められたのだった。年が明けて4月の産経大阪杯では持ったままの大楽勝で、中距離では敵なしの印象さえうえつけた。マックイーン、ライオンと共に3強と崇められた。しかし私のヒーローが皆のヒーローになるその頃からホワイトストーンの放物線は落下運動を始める。

その後の彼の戦歴を詳しく書くつもりはない。0116という数字だけで十分だ。彼は走ることにさえ嫌がっているように見える。私は91年のアルゼンチン共和国杯以来4戦、彼の馬券を買ったことがない。それは彼が本調子でないことを知っているからだ。愛しているから本調子の動きを見せない彼を買うことはできない。彼の調子がどうであるか、調教をみればひとめでわかる。愛しているからそれが辛い、辛いから愛する。

最初というのはいつまで経っても永久に最初である。過去最高や最近はいつかは変わる。ホワイトストーンはいつまで経っても私が最初に愛した馬である。しかし、今でも彼を愛しているかという自信がない。血統や騎手、厩舎情報などに詳しくなればなるほど、馬に対する愛情を捨ててきた。だが、馬券は馬券、馬券をはなれたところで馬を愛するというのが競馬ファンの本来在るべき姿なのではないだろうか。ホワイトストーンを思うと、馬の強さに関係なく愛することができたあの頃が懐かしい。それは初恋にも似た純粋な愛であり、決して忘れてはいけない匂いである。

H4.6記
by TP

木馬会会報(創刊号) 2/2

* 天皇賞特集 *

皇帝の影を追い払え!

トウカイテイオー

君はただ美しいサラブレッドであればいい

4・26天皇賞・春。だれもが2強のマッチレースだと思い、またそれを望んでいた。しかしレース後スタンドを包んだ空気は2強の一角、メジロマックイーンに対する感嘆ではなく、とりとめのない失望であった。その失望はもう一角のトウカイテイオーというただ一頭のサラブレッドにむけられたものだった。

実におかしなレースだった。最も歓声が大きくなったのは、2周めの4コーナーでテイオーがマックイーンと共に先頭に並びかけたとき。そして直線に入ってからその歓声はしりけたため息に変わっていったのだ。空前の競馬ブームといわれるここ2、3年、ゴール前がこんなに静かなGⅠレースは初めて見た。しかし、テイオーにではなく、実は自分たちの作り出した幻想に対してしりけたのであることに気付いた観客はどれ程いるだろうか。

トウカイテイオー、無敗でダービー制覇。その三日後に骨折が判明。以後十ヵ月の休養を余儀なくされる。普通なら十ヵ月も休めばその強さの印象は薄らいでくるものである。しかし彼の場合は違った。周りの環境をもって生まれた宿命が彼をそうさせなかった。父は国内成績15戦13勝、2着1回、3着1回、GⅠを7回制覇し史上最強馬の名を欲しいままにしている“皇帝”シンボリルドルフ。トウカイテイオーは父と同じく無敗で、しかも父よりずっと強い勝ち方でダービーを制覇した。観衆は父を越え得る馬として彼のその後を期待した。休養中でさえ、オグリキャップに代わってヒーローになるはずだったメジロマックイーンが秋のGⅠ戦線で煮え切らない結果に終わったため、観衆達のヒーロー待望の念はさらに強くなった。そして年が明けると、鞍上と一緒に涙のダービーを勝ち取った苦労人安田隆から、同じく父の手綱もとった完璧なる名手岡部にかわることになった。このようにして、ターフにもどった4月には、勝たなければいけない、勝って当たり前、と言う世情が出来上がっていた。しかし彼はそのプレッシャーを感じるよりも、十ヵ月ぶりの実戦ということで走りたくてしょうがなかった。結果は馬なりのままの大楽勝。(このときの相手は決して弱くなかった)そして彼は3週間後の天皇賞に向かうことになった。2400までしか経験のない馬が、10ヵ月の休養後2000を一回使って200のGⅠに挑戦。これで勝たればよいのである。しかし彼ならそれができると考えた。観衆達は今この目で名馬の誕生を見届けたいという一念のもと、彼がただのサラブレッドであることを忘れていた。

大阪杯は勝ったものの、彼は徐々にプレッシャーに苦しみ始めた。いつも父と比べられる、もう楽しんで走ることはいかないのかと。そこでついに彼は男としての誇りを捨てて一幕の大芝居を打つことにした。負けるのは嫌だがこのまま父の影に怯え、楽しく走れないのはもっと嫌だ。舞台は4月26日天皇賞。監督、脚本、主演トウカイテイオー、共演岡部幸雄、そのほかの馬たち。

天皇賞当日、パドックで彼はめずらしく落ち着きがなかった。走るだけではなく、芝居もしなければいけないのだ。今度ばかりはさすがに緊張した。しかし結果は、彼はこれ以上ないといえるほどの完璧な演技をしたのだ。マックイーンはともかく、大阪杯で完封したイブキマイカグラ、さらにはGⅢを勝つのが精一杯のホワイトアローにまで先陣を許しての大差の5着。馬券の対象にはならないが掲示板には載る5着。完璧だった。彼はこの一戦で不敗神話を断ち切り、馬券の対象外であり、しかも力負けという形の5着になることで、父を越えろという観衆の期待をも打ち砕いたのだ。おまけに軽い骨折までして故障がちの馬という印象まで与えた。負けることは大嫌いだ。だからたった一度の敗戦でプレッシャーを一掃したのだ。

素人が見ても他の馬とは違うとわかるフットワーク、落ち着き払ったしぐさ、他を威圧する眼光、全身ばねといった馬体。そして頭の良さ。トウカイテイオーが完璧なる美しいサラブレッドであることは紛れもない事実である。そして天皇賞5着が彼の實力ではないこともまた事実である。復帰すればまた連勝するかもしれない。しかし彼に走ること以上を望むのはもう止めよう。彼はとてつもなく強い馬だが、同時にただのサラブレッドだから

H4.4記 by TP

ということで、このたび日本原電に馬をこよなく愛する人々の集まりである、木馬会が発足致しました。今後どのような活動をしていくか等、決定していない部分が多いので、会員の皆様の意見を参考にしていきたいと思っております。現時点での企画としては、

- ・夏休みだよ!新潟、福島競馬ツアー
 - ・木馬会で馬を一頭持ってみないかい企画(一口馬主;資料は森田が多数持っておりま
 - す。)
 - ・長瀬産業“馬っこ会”との合同コンパ
 - ・競走馬等シリトリ大会
 - ・“シンザンが生きているうちに北海道にいて、ついでに北海道競馬、ばんえい競馬もやっ
 - てこよう”ツアー
 - ・スーパーファミコン“ダビスタⅡ”によるブリダーズカップレース開催
- などがあります。他にご要望等ありましたら、開業;森田(内線4223)までご連絡ください。また、馬についてどんなことでもよいですので、寄稿をお願い致します。(下記参照)新人の勧誘のほうもお願い致します。

馬の小話(実話)

～ある日、中山競馬場にて～

S(馬っこ会):チェリールイってなーんかエッチだよなあ。

M(木馬会):なんだそりゃ

S:きつと桜樹ルイが全盛期の頃に命名したんだぜ。馬主も相当すきだったんだなあとおもうとおおって感じだよ。

M:なるほど。じゃあホワイトストーンは白石ひとみが全盛期の頃に命名されたのか。

S:白石ひとみはそんなに古くねえだろ。

(すみません。わからない人にはまったくわからないのですが…)

次号 5/20 発行予定(オークス、ダービー特集号)

*予走は5/18までをお願いします。

付録;TP版販舎情報